

得意型

国語問題

〔注意事項〕

- 一、試験開始の合図があるまで、開かないこと。
- 二、問題は□〜□で、二十ページにわたって印刷してあります。
ページが抜けるなどしていた場合には、試験監督の先生に申し出なさい。
- 三、解答は、すべて解答用紙に記入し、受験番号・氏名をもれなく、正確に記入すること。
- 四、問題冊子の表紙にも、受験番号・氏名を必ず記入すること。

受験番号

氏名

一

次の①～⑩の——線部について、漢字はその読みをひらがなで、カタカナは漢字に直して書きなさい。

- ① CDの**初版**に特典をつける。
- ② 会が**和**やかな**雰**囲**気**で進行する。
- ③ 新しく**給湯器**を取りつける。
- ④ **青菜**をゆでて、おひたしにする。
- ⑤ 上空に**寒気**が流れこむ。
- ⑥ 会議の終わりに**サイケツ**を取る。
- ⑦ **誰**もが**彼**に**イチモク**置いている。
- ⑧ このセーターの原料は**ヨウモウ**です。
- ⑨ 国の**テンネン**記念物に指定される。
- ⑩ 友好国として、**関係をミツ**にする。

◎文中からそのまま抜き出して答える場合、句読点や記号は一字とすること。また、ふりがなのある漢字は、ふりがなをつけなくてもかまいません。

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

二

マキとカツラは双子の姉妹で、二年前に両親を亡くし、今はおばあちゃんの家で暮らしています。ある日、マキはカツラが編み物の本を持っているのを見て事情を尋ねましたが、カツラは、「お母さんの本だ」ということ以外答えようとしません。隠しごとをされていると感じたマキは、感情をおさえることができず、「自分ばかりずるい」とカツラをどなりつけ、本をベッドの上にたたきつけてしまいました。

「ずるいよ、自分ばっか？」

カツラは、ピクツと表情を変えた。マキを見る目が、いっしゅんにしてするどくなった。

「じゃあマキはどうなの？ ずるくないの？ ひとりだけでなんかやるのがずるいんだったら、マキはわたしなんかよりずつとずつとずるいじゃない！」

ベッドから立ちあがったカツラは、マキに近より、その両腕をギュツとつかんだ。

「わたしたち、半分こにできるものは、なんでもちゃんと半分こにしてきたよね？ でもわかってる？ マキが、マキだけが、ひとりじめしてきたものが、いっぱいあるってことっ！」

「カツラ……」

「それを後ろから見ただけっていう気持ち、わかる？ わからないでしょっ！ マキにはわからないっ！」
つかんだマキの両腕をはげしくゆさぶりながら、カツラはさげぶように続けた。

「わたし、マキみたいにお父さんが話してくれるむずかしい話、すぐに理解できないし、聞いててもねむくなっちゃう。空に散らばっていく音を感じるなんてことも、できない。でも、まったく興味がなかったわけじゃない。わたしだってやってみたかった。お父さんのそばで、いろいろやってみたかったっ！」

「で、でも。全部が全部、そうだったわけじゃないよ。お母さん、いつも言ってたじゃない。しゃべれるようになったのも、字が読めるようになったのも、カツラのほうが早かったって。季節の花がさいたとか、鳥がきれいな声で鳴いてるとか、まわりの変化に気がつくのだって、いつも必ずカツラだったって」

「ちがうっ！ わたし①が言ってるのは、そんなことじゃない。お父さんがなにか新しいことをやりはじめると、『なにしてるの？』って、すぐに寄っていくのはマキだった。あのラジオのときだってそうだったじゃない。マキが、『すごい！ ハンドルを回すと、どうして充電できるの？』って目を て聞くから、お父さんったらすぐくうれしそう。いつだってそう。お父さんはマキのそんなところが、いつだって自慢げだったっ！」

カツラの心のガラスが、われて飛びちったしゅんかんだった。

重いカーテンをひきちぎるようにして取りはらった心の底には、ずっとおおいかくしてきたカツラの想いがあった。言葉になつたその想いは、ガラスの破片のように、するどくマキの心につきささった。

休日(注1)の昼下がり。

リビングのテーブルにおもちゃを広げ、なかよく遊ぶふたごたち。

そのうちのひとりの目が、ちょうどそのとき、そばを通りすぎた父親の動きをとらえ、手にしていたおもちゃを放りだしてそばに行く。

「お父さん。それ、なあに？ なにしてるの？」

「ん？ これかい。これはねえ……」

「お父さんはマキのそんなところが、いつも自慢げだった」

そうだ、そのとおりだ。それこそが、マキのよろこびだった。

だけど、わかってもらえた。そんなときカツラが、どんな目をしてこつちを見ているのかを。だから言えなかった。お父さんをひとりじめして、いっしょにレコードを聴いた、あの宝物のような夜のことを。

「ごめん！ カツラ、ごめんなさい」

マキは、丸まったカツラのふとんにしがみついてさげんだ。

「ごめんね、ほんとにごめんね、カツラッ！」

しがみついた腕に力をこめ、何度も何度もあやまった。

ただどカツラははげしい声を上げて、泣くばかりだった。

そのときマキは、自分の腕の中に体温を感じた。泣きながらふるえる、カツラの体のあたたかさを感じた。そして思ったのだ。

このままカツラまで、いなくなってしまうたらどうしよう。そしたらもう、自分は生きてはいけない、と。

「カツラッ！」

⑥ マキは自分の腕に、さらに力をこめた。

腕の中にあるカツラを守るように。

泣きくずれるこの体が、こわれてしまわないように。

このまま自分を置いて、どこかに消えてしまわないように。

「ウワアア……なんで、なんで死んじゃったの？ 帰ってきてよー、お願い、帰ってきてえー」

聞こえてくる泣き声が、^⑦両親を呼ぶ声に変わった。

「会いたいっ。お父さん、お母さん、会いたいよーっ。会いたいよおお」

⑧ カツラがくり返す「会いたい」は大きな波になって、そのままマキにふりかかってきた。それは口にしてはいけない言葉だった。

だって、現実を変えられないから。

時間もどることなんて、絶対ぜったいにないから。

でもふたりはこの二年間、圧倒あつとう的な愛情のかたまりを失ったというその現実の上に立っていたのだ。たがいに強くしがみつき、足元の悲しいことには目をつぶって。

限界だった。マキの心も、がまんできなくなった。

「会いたいよ。お父さんとお母さんに、わたしだつて会いたい！」

なみだはあふれでた。

悲しかった。

くやしかった。

世界の果てまでさがしたつて、両親はもう、どこにもいないのだ。

現実も、過去の思い出もなにもかも忘れ、マキの頭の芯しんにあるのは、ただ「会いたい」という感情だけだった。

しばらくすると、なみだはかれた。

まるで、備注2わつていたなみだの量まで同じだったかのように、ふたりは同時に泣きやんだ。泣きはらした目のまま、ふたりはベッドの上にならんですわっていた。

左の肩に、かすかにふれるカツラの体温を感じながら、マキはまた「ごめんね」とあやまった。

⑨ 「わたし、ずるかった。カツラの気持ち、なんとなく気づいていたのに」

かくしてきたヒリヒリした気持ちさをさらけ出すのは、いたみがともなった。でもマキはまず、父親の新あらたさんのうれしそうな

顔が見たくて、いつもなんにでも一番に反応するようになってしまったのだと打ちあけた。そして、自分だけお父さんといっしょにレコードを聴いた夜があつて、そのことをどうしても話せなかったということも。

「もうあやまらなくていいよ。わたしだって、ひとりじめしちゃってたんだもの」

ひぎの上の本をそつとなでるようにしながら、カツラは泣きさきんでカサカサになった声で、しずかに話しはじめた。

「この編みぐるみの本はね、三年生になつてすぐ、押し入れの奥で見つけたの。毛糸や編み針といっしょの袋に入つてね。『これなに?』って聞いたら、お母さん、はずかしそうにペロツと舌を出して教えてくれた。わたしたちの四歳の誕生日プレゼントに作ろうと思つて買ったんだけど、とちゅうであきらめちゃつたんだって」

「四歳の誕生日……」

⑪「お母さん、編み物なんてやつたことなかったのに、どうしてそんなことを思つたか、わかる?」

「ううん」

「それはね、わたしたちが四歳になる数か月前のことだったらしいの」

夕食の準備をしている緑さんのところへ、一冊の絵本を持ったカツラがやってきて、こう言った。

「おかあさん、これ、せかいにひとつだけのもの?」

「うーん、ちがうね」

するとすぐに、マキも遊んでいたロボットのおもちゃを持ってきた。

「おかあさん、これ、せかいにひとつだけのもの?」

「ううん、それもちがうね」

それからふたりは、いろんなおもちゃを持ってきては、同じ質問をくり返した。

どれもちがうとこたえると、がっかりしたそぶりで顔を見合わせ、ふたりは声をそろえて言った。

「せかいにひとつだけのものって、どこにあるんだろ？」

(ははあ、これはもしかして)

緑さんは気がついた。ふたりが通う保育園では、今、クリスマス会のダンスの練習中で、たしかその曲の歌詞に『世界にひとつだけ』という言葉が出てくるのだ。

緑さんはふたりに聞いた。

「マキとカツラは、世界にひとつだけのものを、探しているの？」

「うん！」

ふたりは、声を合わせてうなずいた。

「それでお母さんはね、これはもう手作りするしかないって思っ(注3)て、手芸屋さんに行ったんだって。この本にのってるクマを、色ちがいで二個作って、ほらこれが世界にひとつだけのものだよって言いたくなっただって」

「へえ、ぜんぜん覚えてないや」

そうこたえると同時に、マキの頭に自然とひとつの情景が浮うかびあがった。それは、なにかのひょうしに、急にはりきりだす母親の様子ようすだった。

マキはフツと笑った。

「でも、お母さん、お料理は得意でも、手芸とかは苦手だったよね？」

「うん。保育園用の手さげ袋ぶくろや上うわばき入れを作ったの、全部おばあちゃんだったもんね」

カツラもクスクス笑っていた。

「たしかに。じゃあ、編みぐるみを作ろうとしたのって、最初(b)むぼうっから無謀な計画だったってことじゃない。なんかちよつと、お母さんらしいや」

「だね。カンはやたらするどいんだけど、お父さんみたいに細かい作業は、てんでダメだったもんね」
ふたりは、顔を見合わせて笑った。

そこからは、まるで堰を切ったように、昔の思い出があふれた。

お花見で、飲み物の紙コップに桜の花びらが入ったとき、お父さんは「風流だ」ってよろこんだけど、お母さんは「あーあ」と顔をしかめたこと。

夏の夜に花火をやると、「線香花火の火の玉が、だれが一番長持ちするか競争しよう!」と、毎年必ずお母さんが言いだすこと。

紅葉を見に行ったのに、とちゅうの道の渋滞がひどくて、みんなでえんえんと車の中でしりとりをやり続け、一番夢中になっていたのがお父さんだったこと。

寒い季節になると、よくトランプやボードゲームをして遊んだけれど、お父さんの負け方がわざとらしくて、小声でお母さんに注意されていたこと。

「なつかしいね」

カツラの言葉に、マキは「うん……楽しかった」とこたえた。

⑫ マキはおどろいていた。思い出と向き合うことがこわかったけど、カツラとふたりならだいじょうぶなんだ。話していて、ちゃんと心にあったかいものが残る、と。

カツラが、マキの肩にもたれかかるようにして言った。

「わたしね、誕生日の日に、ロウソクをあかりの中でしてくれる、お父さんとお母さんの話が好きだった」

「うん、わたしも」

それは毎年恒例のことだった。(注5) バースデーケーキのロウソクに火をともしと、ひとつ年が増えたマキとカツラのために、新さんと緑さんは言葉を贈ってくれたのだ。

言葉は必ず、「マキ、カツラ、今日まで元気でいてくれて、ありがとう」から始まった。そしてそのあとに続くのは、ふたりの未来につながるような言葉だった。

「ね、カツラ。言われた言葉がうれしくて、ふたりで思わず泣いちゃったのはさ、二年生の誕生日だったっけ？」
カツラはすぐに首を横にふった。

「ちがうよ、一年生のときだよ。だってお父さんは初めに、こう言ったもの。『入学して一か月たったけど、なにかこまったことはありませんか?』」

「あ、そっか、そうだった」

マキがうなずくと、ふたりは声を合わせて、あとの言葉を続けた。

『これから先、学校でどんなことが起こっても、お父さんとお母さんは、マキとカツラの味方です』

マキは、ツーンと鼻の奥おくがいたくなり、また泣きそうになった。

そして同時に気がついた。

両親との思い出は、もうこれ以上、増えることはない。でもこれからは、自分たちが半分こにしたものを合わせたらいいんだ。そしたら思い出は、今よりもっと増えてゆく。

マキはそのとき、やっと心の重荷を下ろしたような気になった。

(たてない) 蓼内明子『プレーメン通りのふたご』

(注1) 昼下がり：昼を少し過ぎたころ。

(注2) 備わっていた：本来持っていた。

(注3) 手芸屋さん：編み物やししゅうなどに必要なものを売っている店。

(注4) 渋滞：道路に自動車がつまって、なかなか先に進めない状態になること。

(注5) 恒例：ある時期にきまって行われる行事。

問一 線①「わたしが言ってるのは、そんなことじゃない」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア マキと自分とどちらが愛されていたかという問題ではない。
- イ マキと自分のどちらが優れているかという問題ではない。
- ウ ほめてくれた相手が誰であったのかという問題ではない。
- エ 自分のことをマキに認めてもらえるかという問題ではない。

問二



に入ることばを次の



の中から選び、適当な形に直して答えなさい。

輝かがやかせる 光あらせる みはる そらす

問三

線②「そこには、まばたきもせずじっとこつちを見ている、表情のうすい目があった」とありますが、このときのカツラの気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 父親に、自分にも分かるように説明してほしいと思う気持ち。
- イ 自分より父親に愛されているマキをうらやましく思う気持ち。
- ウ いつも父親をひとりじめするマキをうらめしいと思う気持ち。
- エ 父親に、自分だけのけ者にせず、仲間に入れてほしいと思う気持ち。

問四

——線③「マキは、息を吸うことさえ苦しくなった」とありますが、なぜ苦しくなったのでしょうか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア カツラを信じていたのに、とつぜん自分をうらぎったことに強いショックを受けたから。
- イ 自分を責めるカツラの言葉が、これまで抱えていた思いと重なり、苦しくなったから。
- ウ カツラも自分と同じような苦しみを味わっていたのだと知り、心の底から驚いたから。
- エ カツラも自分と同じ罪悪感を持っていたのだということが分かり、共感をおぼえたから。

問五

——線④「逃げるように」とありますが、このときのカツラの気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア マキとは今後いっさいかかわりを持ちたくないと思っている。
- イ 感情をむき出しにした恥ずかしさをひたすら隠したいと思っている。
- ウ 自分の中にある罪悪感から今すぐのがれたいと思っている。
- エ ようやく手に入れたものをぜったいに渡したくないと思っている。

問六

——線⑤「あの宝物のような夜」とありますが、その夜はマキにとってどのような時間だったのでしょうか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 父と二人きりで過ごすことのできた、かけがえのない時間。
- イ 父がカツラより自分を愛していると実感できた、大切な時間。
- ウ 父との特別な関係をカツラに見せつけることのできた、幸せな時間。
- エ 父が自分にだけ心を開いてくれた、喜びにあふれる時間。

問七 — 線⑥「マキは自分の腕に、さらに力をこめた」とありますが、このときのマキの気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 傷ついたカツラの心を両親にいやしてほしいと願っている。

イ カツラに対してひどい仕打ちをしたことを謝りたいと思っている。

ウ 自分がそばにいるから安心していい、とカツラを励ましている。

エ 大切なものをもうこれ以上失いたくないと必死になっている。

問八 — 線⑦「両親」とありますが、ふたりにとって両親はどのような存在だったのでしょうか。これより後の本文中から十一字で探し、そのまま抜き出して答えなさい。

問九 — 線⑧「カツラがくり返す『会いたい』は大きな波になって、そのままマキにふりかかってきた」とありますが、このときのマキの状態として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア がまんし続けていたカツラの苦しみがついに爆発し、マキの心を押しつぶした。

イ カツラがこれまで抱いてきた恨みが、マキの胸にも次第にひびいてきた。

ウ 両親を恋しがるカツラの感情が、押さえ込んでいたマキの感情にも重なりあってきた。

エ 解き放ったカツラの心が、これ以上ない重荷となってマキにのしかかってきた。

問十 — 線⑨「かくしてきたヒリヒリした気持ち」を言いかえている部分をこれより前の本文中から十二字で探し、はじめと終わりの三字ずつで答えなさい。

問十一 〓線①「はずかしそうに」が直接かかるところはどこですか。ア～エから選び、記号で答えなさい。

はずかしそうに ア ペロツと イ 舌を ウ 出して エ 教えてくれた

問十二 〓線⑩「わたしたちの四歳の誕生日プレゼント」とありますが、それは何ですか。本文中のことばを利用して、十字以上十五字以内で答えなさい。

問十三 〓線⑪「お母さん、編み物なんてやったことなかったのに、どうしてそんなことを思ったか、わかる？」とありますが、苦手な編み物をしようと思った背景には、「緑さん」のどのような思いがあったのでしょうか。本文中のことばを利用して、「…という思い。」に続くように、二十五字以上三十字以内で答えなさい。

問十四 〓線①「無謀な」・②「堰を切ったように」の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

① 無謀な

ア 周りの人にまったく気を配らない
イ 結果がどうなるかよく考えない
ウ 不可能であることを十分理解した
エ 根拠こんきよのない自信にあふれている

② 堰を切ったように

ア おさえていたものが一気に流れるように
イ 力強いあと押しをもらったかのように
ウ これまでの悲しみなどなかったかのように
エ 一つ一つ、ゆっくりかみしめるように

問十五 — 線⑫「マキはおどろいていた」とありますが、なぜ驚いたのでしょうか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 両親との思い出話をしているうちに、カツラが自分のことを許し、心を開いてくれるようになったから。
- イ 両親と自分たちの楽しい思い出が、想像していた以上にたくさんあったのだとカツラが気づかせてくれたから。
- ウ 亡なくなった両親のことを思い出すのは悲しいが、カツラとならば悲しみを半分こにできると知ったから。
- エ 両親を思い出すのはつらいことだと思っていたが、カツラと話すとき楽しい気持ちになれると気づいたから。

問十六 カツラと話をしていくうちに、マキの心に変化が現れました。最終的にマキが感じたこととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア カツラが胸に秘めていた事実を打ち明けたことよって、自分も罪の意識を軽くすることができた。また、許し合うことよって姉妹のきずながいつそう強くなり、共に成長し、支え合って生きていくのだと決意することができるようになった。
- イ これまでカツラに対して抱いだいていたわだかまりが解け、心が軽くなった。また、カツラがいるからこそ、お互たがいの心の中に両親の存在を感じとることができ、両親との思い出がこれからの自分たちを支えてくれるのだ、と信じるようになるようになった。
- ウ 両親にかかわる楽しい思い出話を語り合うことにより、胸の中に積もり重なっていた悲しみが少しずつ薄うすれていくのを感じることができた。そして、その悲しみは自分たちが大人になればすべて消し去ることができるのだと、深く理解できるようにになった。
- エ 学校でつらいことがあったとしても、心の中に両親がいて、いつも応援えんしてくれると信じることができた。そして、両親の応援があれば、どんな苦しみや困難も乗り越こえることができるのだと思うと心強つよく感じられて、生きる気力がわいてきた。

三

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

チンパンジーは、集団で狩^かりをするのが知られていますが、そう^①した集団行動は人間の共同作業とは似^(注1)て非なるものです。人間の場合であれば、作業の目的や役割分担を事前に話し合^あって決めておきます。しかしチンパンジーはそのようなことはありません。獲物^{えもの}になる小型^{がた}のサルなどを発見した個体が、「捕^とって食^くいたい」と感じる。それで獲物を追^おいはじめます。その様子^{ようす}を見た仲間は、自分も獲物を追^おいかけたり、あるいは逃^にげる獲物の行き先を予測^{ぼく}してそちらに回^まりこんだりします。それらはすべて、各自の判断で行われます。「俺^{おれ}は追^おうから、お前は先回^まりしろ」などと連絡^{れんらく}したりはしません。

それ^(注2)で首尾よく獲物を捕^{つか}まえた後、各自の働きに応じて獲物を分配^{ばい}するといったこともありません。人間の狩^かりであれば、家で留守番^{るすばん}役^{やく}をしている人にも黙^{だま}っていても獲物が分配^{ばい}されますが、チンパンジーは、獲物を手にした個体に対して自分から積極^{せつじやく}的に要求^{ようきう}してはじめて分けてもらえます。その場合も、要求する側は、「自分は獲物を直接捕^{つか}獲^{かく}しなかったが、追跡^{せき}する^②という重要な1を果たしたのだから、2は正当な要求だ」などと思^{おも}っているわけではないでしょう。単に獲物を持っている相手から3と思^{おも}っているだけだと思^{おも}われます。

要するにチンパンジーは、他の個体の感情や行動の意図を読み取^とってそれに対応^{おんじゆん}してはいるものの、自分の感情や行動の意図などを意図的に相手に伝えて共有^{くわうゆう}を図^{はか}るといったことはないのです。

かれらは、見返^{みかえ}りを求め^{もと}めずに見^みず知らずの個体に親切^{しんせつ}にすることはありませんが、仲間内^{うち}では通常^{じゆうじゆん}の互恵^{ごけい}的な行動を行いますし、ひよつとすると不正^{せいじ}に対する怒^{いか}りといった道徳感情もあるのかもしれませんが、しかし、そうだとしても、各個体がそれぞれに「餌^{えさ}を独占^{せん}するあいつは不正だ」と腹^{はら}を立てたり、その感情^②に従^{したが}って報復^{ほうふく}したりするだけであつて、合意^{ごうい}され共有^③された正しさはないということです。何かについて合意^{ごうい}するためには、話し合うための言語^{ごんご}が必要^{ひつやく}ですが、動物には言語^{ごんご}がないのです。

ゴリラやチンパンジーは、状況や感情に応じてさまざまな鳴き声を上げますが、そうした声は言語に相当するものではなく、人間でいえばとっさの叫び声に相当するものと考えるのが妥当です。^(注3)

人間も、言語を話す以外にさまざまな声を出します。驚いたときには「わっ」と、痛いときには「ぎゃっ」と叫びます。楽しいときには「わっはっは」、「悲しいときには「うえーん」といった声が出てしまいます。こうした声は人類普遍的であり、私たちはまったく異なる文化圏の人たちの叫び声を聞いて、かれらが驚いているのか痛いのか、楽しいのか悲しいのかを正確に読み取ることができません。しかしもちろん、そうした声を上げている本人は、他人に自分の感情を伝えることを意図してわざと声を上げているわけではありません。そうした声は自然に出てしまうのです。

A

そうした声を意図的に抑えることは困難です。

テレビの動物番組などで、「動物の言語」と称するものが紹介されることがあります。

B

、アフリカのサバンナに住む

ベルベットモンキーというサルには、三種類の天敵^(注6)がいます。ヒヨウとワシとヘビです。ベルベットモンキーは、それぞれの敵に対応した三種類の叫び声を鳴き分けるそうです。ヒヨウを見た個体が叫ぶと、他の個体はそれを聞いて地上を警戒しながら木の枝の先の細いところに逃げます。ワシを見た個体の叫び声を聞いた場合は、空を見上げながら木の葉の茂ったところに隠れます。ヘビの場合は、二本足で立ちあがってあたりを見回します。

こうした行動を人間が観察すると、ベルベットモンキーが「ヒヨウだ!」「ワシだ!」「ヘビだ!」などと、仲間言葉で伝えているように思いかもしれません。しかし、かれらの叫び声を人間の言葉と同じようなものと考えるのは誤りです。なぜかというと、そうした声は状況に対応して

4

ものだからです。ヒヨウを見たベルベットモンキーは叫ばずにはいられません。そうした声は、人間でいえば驚いたときに出る叫び声に相当するのです。

(中略)

人間は、他の多くの動物とは異なって、正しいことと不正なことを感じる感情の仕組みを持っており、それが道徳的な善悪の起源にあります。助け合いや利他的な行動への好みや喜び、利益を独占する行為や暴力的な強制への嫌悪や怒りが、人間に

独特の「道徳」という領域を開くのです。

ア

そうした感情の仕組みは、生物学的・遺伝的な要素として人間という生物種に組み込まれているようです。そこで、進化倫理学では、人間が不正に対して怒りを感じたり、他人に親切にすることに喜びを感じたりする感性を持つていることについて、互恵や間接互恵によって説明します。しかし、そうした感情は、各個人がてんでに感じているだけでは道徳的な正しさや不正ではありません。「個人が正しいと感じること」と「正しいこと」、「個人が不正だと感じること」と「不正」とは、それぞれ別のことです。

イ

チンパンジーなど、集団で暮らしている知能の高い動物であれば、互恵的な行動を行いますし、それを裏切った者に対しては怒りを感じるのかもしれませんが、かれらはそうした自分の感情を仲間 intentionally に伝えることはありません。動物は鳴き声によってコミュニケーションをしているように見えますが、そうした鳴き声は人間でいえば意図せずに出してしまう叫び声に相当するものであって、動物には言語はないのです。

ウ

他方、人間は自分の感情や意図を他人に伝達しようとします。受け手の側も、こちらが何かを伝達しようとしているのだと理解してくれます。その結果、人間は理解を共有し、新たな社会のあり方や文化を創造していきます。正しさについての合意も作られていきます。

(山口裕之「みんな違ってみんないい」のか？ 相対主義と普遍主義の問題)

(注1) 似て非なるもの…一見似ているように見えるが、実はまったく違っていていること。

(注2) 首尾よく…うまく事が運んで。

(注3) 妥当…もつともなことだと考えられること。

(注4) 普遍…すべてに共通すること。

(注5) 圏…限られた地域や範囲。

(注6) 天敵…ここでは、ベルベットモンキーをつかまえて食べる動物のこと。

(注7) てんでに…ばらばらに。

問一 — 線①「そうした集団行動」とありますが、このときのチンパンジーの動きとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 獲物を捕って食うという目的を果たすために、各自がそれぞれの判断で動く。
- イ 仲間に獲物を独占されることを防ぐために、相手の行き先を予測しながら動く。
- ウ 事前に仲間とよく相談して、それぞれがやるべきことを決めてから動く。
- エ 個体として獲物を捕ることよりも、集団として獲物を捕ることを優先して動く。

問二

1

2

に入ることを本文中から漢字二字で探し、それぞれ抜き出して答えなさい。

問三

3

に入ることばを、本文中のことばを利用して十字以内で答えなさい。

問四

— 線②「その感情」が指している部分を本文中から十字以内で探し、そのまま抜き出して答えなさい。

問五

— 線③「動物には言語がないのです」とありますが、その意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 相手に合わせることはできるが、相手と共通認識を持つ手段は持ちあわせていない。
- イ 自分の判断で動くことはできるが、相手の意図や感情に合わせることはできない。
- ウ 自分の利益になることには積極的だが、相手の利益のためにはぜったいに動かない。
- エ 相手の気持ちを尊重することはできるが、自分の気持ちを伝えることはできない。

問六

A

B

に入ることばとして最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア しかし イ たとえば ウ むしろ エ もちろん

問七

4

に入れることばを本文中からそのまま抜き出して答えなさい。

問八

この文章では、「正しさとは、どのよう^{りようかい}にふるまうことが道徳的に正しいのかについての共通了解のことなのです。」という一文が抜けているところがあります。アウのどの部分に入るでしょうか。最も適当なところを選び、記号で答えなさい。

問九

人間が合意を形成していく上で必ず行っていることは何ですか。(ア)・(イ)に適当なことばを入れて、「(ア)によって、(イ)こと。」の形になるように、文を完成させなさい。ただし、次の条件にしたがって書きなさい。

条件

(ア) …本文中より漢字二字でそのまま抜き出す。

(イ) …最終段落のことばを利用して、十五字以内でまとめる。